1991.8.15

CYRニュース No.27

幼い難民に未来を

発行：幼い難民を考える会　〒160 東京都新宿区南元町6－2　TEL.03-3353-9947　FAX.03-3353-9739

写真提供／園田北小学校

国際理解教育を考える

「国際化」のかけ声があちこちで聞こえます。しかしその割に、実際はあまり進んでいるとは言えません。一方、外国人の流入は年を追って増え、様々な場で対応を迫られています。その１つが教育の現場です。

今回は、国際理解教育を考えてみましょう。

ベトナムの子らと学習して

元尼崎市立園田北小学校教諭　渡辺　千枝

私の勤務していた尼崎市立園田北小学校には、1982年に２名のベトナム児童が転入学して以来、８年で30名のベトナムの子どもが在籍してきました。やっと２年前から、ベトナムの子どもたちを指導するための加配教員が配置され、国際理解教育が取り上げられることになりました。

それまでの約６年間は、それぞれの学級で担任の裁量でベトナム児童との交流が工夫されていたのです。しかし、1987年頃から急にベトナム児童の転入が多くなり、学校全体で取り組む必要が出てき

ました。

14学級程度の小規模校で、学級に複数のベトナム児がいることになると、休み時間などどうしても彼らだけのかたまりができてしまいます。周囲の日本人の子どもたちとも離れてしまう傾向がみえてきました。

私たちの学校にくるまでに何年間か日本に滞在している子どもが多いので、日常会話に困るほどのことはなかったのですが、細かな部分での表現がうまくいかず、お互いの意思を通じ合うにはむずかしい場面もあります。ベトナムの子どもたち（とくに女子）同士が集まって行動することが多くなりがちでした。お互いが固まっている安心感があったのでしょう。

一人、二人が在籍していた時のほうがずっと早く友だちができ、教えあっていたのに、かえって数が多くなると溝がなかなか埋めにくい感じがします。しかし男子は積極的に仲間入りをしていきました。遊びのなかで衝突はありましたが、ほとんど心配はありませんでした。

「先生、国語きらい！！ 算数しようか」

言葉のむずかしさが学習の理解にも影響してきます。日本の子どもたちといっしょの一斉授業の中ではとくにむずかしいのです。とくに国語がむずかしいので、他の教科もさらにむずかしくなってきます。日本の子どもでさえ、漢字を覚えたり、複雑な表記の方法を覚えるのはかなりの努力が必要です。文章の読解にも苦労をします。それを思うとベトナムの子どもたちにいかに大変な努力が要求されているかがわかります。

しかし、子どもたちの力はすごいと思います。とくに1年生から日本の子どもたちといっしょにスタートしたベトナムの子どもたちは、日本人の子どもたちと同程度かそれ以上の力をつけていったのです。

途中入学の高学年の場合は、読むことから書くことへ次第に身につけていく様子がはっきりとわかりました。

でも、やっぱり「国語はきらい」はなくなりません、読めるようになっても、内容の理解はなかなか困難なものがあります。いろいろな例を引きながら状況や心情をわからせていくだけでした。

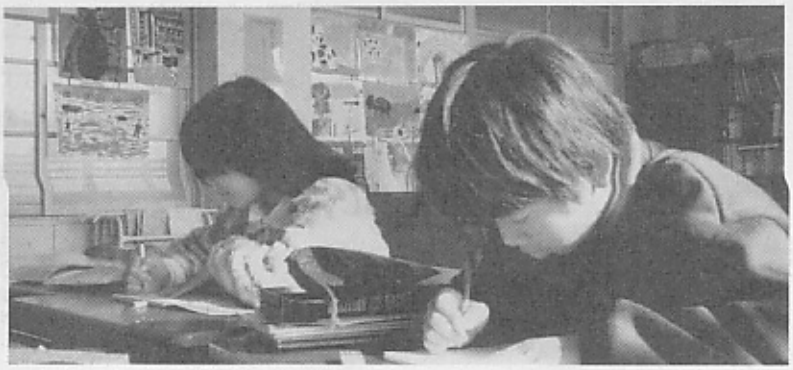
「算数はすきよ。算数をやろう。」計算はわかりやすく、答えがはっきりしていることもあって彼らの得意の分野です。個人差はありますが、なかなか早くできる子もいました。

中学年では「九九」を覚えているかどうかが算数で大きく影響してきます。日本の子どもたちが九九を覚えるのに独特の言いまわしで仕組みを覚えていくのに対して、ベトナムの子の場合、1から順にノートの端に答えを書いておいてからやらないとわかりにくいことが多く、強いて言えば、これも言葉の上でのハンディだと言えるでしょうか。

かけ算の九九の表を持たせて、見ながら計算させるなど、中学年の間に是非、かけ算・割り算はマスターしてくれよと願いながらの毎日でした。

昨年5月に、6年生に編入学してきた女子Rさんは、香港の難民キャンプから叔母さんといっしょ

写真提供／UNHCR



写真提供／園田北小学校

に日本にきました。姫路の定住センターに1か月滞在した後、叔父さんたちの住む尼崎へ来ました。学校では初めての編入学でした。年齢超過のこともありましたが、6年生に入ることになりました。当然言葉が通じないという問題があり、どうしようかと思いましたが、3年前から日本に来ていた弟のF君が同じクラスにいたので、彼に通訳をしてもらいながら、取り出し授業を1日1時間ずつやっていきました。その他の授業は教室で担任の先生の指導のもとに、級友の助けを得て勉強しました。彼女自身のたいへんな努力で、1学期で国語の教科書が読めるようになり、漢字もほとんど書けるようになりました。すばらしい進歩です。担任の先生や級友の励ましが大きかったと思います。毎日、私のところへ来る時間の中でもどんどん語彙が増えていきました。算数で「割合」や「体積」の学習をする時の用語の説明はなかなかむずかしかったですが、手振り・身振りでやっとわかってもらえた時の気持ちは何とも言えません。

図書館で借りてきた「赤ずきんちゃん」もRさんと私の2人芝居です。「先生、私知ってるよ。」と筋を追いながら最後まで教室が舞台になって2人で登場人物を演じわけたのです。Rさんはベトナム語で、私は日本語でせりふを言いながら。終わった時、2人で大笑いでした。自分の気持ちを充分に表現できないけれども、一生懸命日本語をマスターしようとがんばる姿は涙ぐましい限りでした。

すごい！！
アンカーはベトナムの子や

体育はどの子もすばらしい力を発揮し、とくに男の子はサッカーやバスケットがうまく、校内の球技大会で生き生きと活躍していました。

秋の体育会のメインイベント学級対抗リレーでは、6年生3クラスのアンカーがすべてベトナムの子どもだったというにぎやかさです。彼ら自身が自信を持てるというだけでなく、周囲がしっかり彼らを認めることのできる場でもあるのです。

いちばん苦手な教科は社会科です。6年生の歴史学習では、「何でこんなのせなあかんの？」と質問してくることんもありました。彼らには彼らの祖国の歴史や現状を知るほうがずっとよいのではないかと考えますが、教える側にその準備が整っていないもどかしさを感じます。

日本の教育体制の中で、ベトナムの子どもたちが教育を受けるのはたいへん無理があると思います。しかし、彼らが日本で定住するためにはやむを得ないことなのでしょうか。

学力だけでなく、家庭事情の把握や連絡という面でも、学級担任では手が回らない部分を加配教員が手助けします。家庭事情もいろいろ異なります。学校教育への関心の度合いも家庭によってちがいます。欠席日数が多いのも目立ちますが、これも教育への関心度に関わりがあると思えます。

給食や教材の費用は市から援護を受けていますが、遠足や宿泊訓練には、「お弁当が作れない。」

写真提供／UNHCR

「準備ができない。」という理由で欠席することが多かったのです。最近では、理解が進んでほとんど参加できるようになり、日本社会にベトナムの人たちも次第に溶け込めるようになってきた表れかもしれません。

3月に4人の卒業生を中学校へ送り、彼らが3年間を無事に過ごして巣立ってくれることを祈っています。そして、4月に8名のかわいい1年生が入学してきました。彼らが日本人の中ですくすく育ってくれることを願っています。

国際交流学級に1年間通って

―― 教わった立場から

中学校に入った初めの1年間、クラスの授業か国語の時間は、国際交流学級という外国人だけのクラスに行きました。1日1時間。学年毎に1クラス。担任は一人で1人から3人くらいをみます。小学校の国語を習ったり、社会など自分のクラスでわからないことを補習してくれました。このやり方は、勉強に追いつくにはとてもよかったと思います。ただ、外国人同士はとても気が合って、仲間意識が出た反面、日本人の友だちができませんでした。国際交流学級に通わなくなった2年目に仲のよい日本人の友だちができました。

今、国際交流学級には10人もいるそうで、人数が多すぎて細かい指導を受けられないようです。

――神奈川県大和市の公立中学3年生のAさん（ベトナム）の話。

（聞き手／相川明子）

写真提供／UNHCR

国際理解教育って何？

―― 学校での様々な取り組み

国際理解教育というと、どういう授業を想像しますか？　一口に「国際理解教育」と言っても、その内容は様々です。語学（ほとんどが英語）を外国人が教える、外国の学校と手紙・作品等を交換する、交換留学を行なう、音楽・民話などを通して外国の文化を学ぶ、日本語を教えるなどが学校で行なわれています。

日本での「国際理解教育」の歴史はまだ浅く、20年程度です。帰国子女教育から始まった学校が多く、関西では同和教育を出発点としている学校も多いようです。文部省では、ようやく2年前の1989年から「国際理解教育」の指定校を全国に10校設けました。（91年は6校）　国際理解教育とは何かという定義をしてしまうと、それ以上の広がりが期待できないとして、あえて定義をしないそうです。

国際理解教育が進んでいるといわれるのが、東京都や神奈川県。神奈川県では、昨年（1990年）教師向けに「国際理解教育指導資料」を作成しました。国際理解教育の必要性、目標、指導の事例などのほか、在日韓国・朝鮮人、中国帰国者、インドシナ難民、一時的に滞在する外国人について個別に、日本に来た背景、日本に来てからの受入れ態勢、指導にあたっての留意点など、かなり細かく述べています。

インドシナの子どもたち、中国からの帰国者の子どもたち、あるいは最近急激に増えている南米などほかの外国の子どもたちが大勢いる学校では、前掲の園田北小学校のように、日本語の指導を中心にしている所がほとんどのようです。日本語がわからなければ教育の効果もあがらず、友人関係もう

親にとって母国語であっても、子どもたちには外国語に近い。ラオスの母国語教室にて。

まくいかないのでこれは当然のことと言えるでしょう。

放課後、日本語の勉強ができるよう地域の学校で日本語教室を開いているところもあります。横浜市の場合、81年に中区にある本町小学校に初めて日本語教室を設けました。その後10年間で、外国人登録者数は倍増、特にこの2年間で急増。外国籍の子どもたちも増えた（市立小中学校在籍の外国籍児童・生徒数1180人／1990年）ため、91年4月から、さらに2つの教室を鶴見区の豊岡小学校と戸塚区の川上北小学校に設けました。これらの学校に遠くて通えない場合には、週2回程度の巡回指導も行なっています。

神奈川県としては、90年度から「日本語指導等協力者派遣事業」を始め、依頼のあった市に対し、母国語が話せる日本語指導者を派遣しています。

このように神奈川県の場合は、教育現場を支える制度も整いつつあるようです。10年前、インドシナの子どもたちを受け入れ始めたころは、学校あるいは担任の熱意に頼っていました。そのため、子どもたちは入った学校によって、伸びもすれば、落ちこぼれもするという運、不運が大きかったのです。対応の遅い地方自治体では、今もこのような状態が続いています。神奈川県での試みが、全国に広がることを期待します。

しかし、日本に住む外国人に日本語を教えることが、即「国際理解教育」とは思えません。外国籍の子どもに戸惑い、「日本語がわからず、文化・習慣の違う子どもにどう教えればよいか」という大問題と日々取り組んでいる学校は急増しています。これらの学校はたいへんさと同時に、日本語を教えることで日本語を客観的に見ることができ、文化・習慣の違いを材料に日本の子どもたちに、日本とは文化、習慣の違う国があることを教えられる有利さを持っています。国際理解教育の生きた教材が、外国籍の子どもがいる学校にはあるはずです。

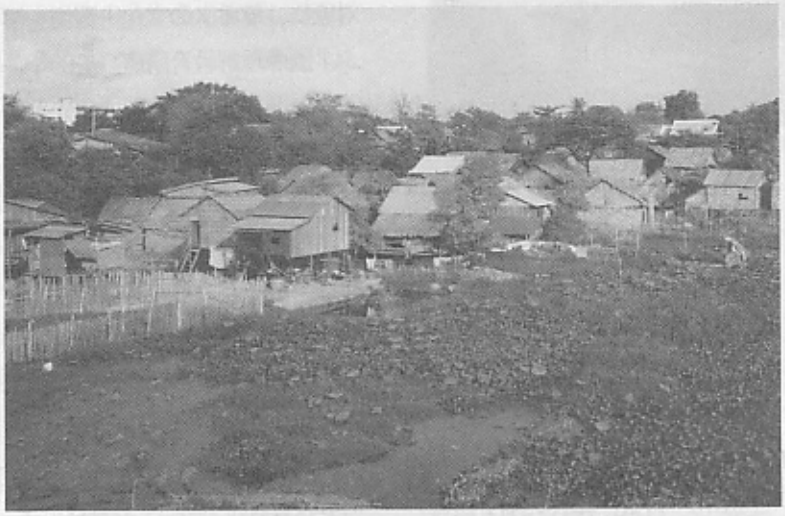
在日韓国・朝鮮人がたくさん通う学校では、朝鮮の文化を学ぼうという動きが少しずつではありますが出てきています。「学ぶ」という姿勢が、国際理解教育の基本にまず必要なのです。

在住ラオス人が多い神奈川県綾瀬市の教育委員会では、ラオス人を講師として迎え、学校の先生を対象に、ラオスの文化・習慣を学ぶ「国際理解教育講座」を89年、90年に開きました。現場の先生にまず理解してもらおうという試みは、高く評価されるべきでしょう。現場の教師が習慣の違いを理解できないと、カンボジアの女子生徒の保護者にピアスをはずすよう指示することも起こります。国際理解教育が進んでいると評判の、東京のある中学校でさえ、こういうことがありました。

大阪府八尾市の教育委員会でつくっている「在日外国人・国際理解教育」の指導書には、世界人権宣言、国際人権規約、人種差別撤廃条約（ちなみに日本はまだ批准していません）、児童の権利宣言などを載せています。同和教育と取り組んできた歴史を感じさせる指導書です。人権、とくに外国人の人権に対して意識の低い私たち日本人に必要なのは、八尾市の例に見られる、人権尊重を前面に打ち出した国際理解教育ではないでしょうか。

子どもの権利条約（これも日本はまだ批准していません）にある「アイデンティティの保全」「少数者の子どもの権利」が保障されるような教育が日本でも行なわれるようCYRの国内での活動も展開していきたいと思っています。

カンボジアで子どもの環境改善プロジェクト秋に始動



―――― プノンペン郊外で

カンボジア国内での活動を具体化させるにあたり、CYRはタイにプロジェクト・チームを設けました。チームは新たにアドバイザーとしてスパーパ・オンサクルさんを迎え、この秋からの仕事の準備を進めています。仲間に加わったスパーパさんは、タイの社会福祉事業で知られるホルト・サハタイ財団のソーシャル・ワーカーです。幼児と女性の福祉活動を専門とするスパーパさんがCYRのカンボジア・プロジェクトに関心をもったのは、逆境にある子どもの無限の可能性を育む環境づくりに共鳴したからです。

昨年9月から始めた実態調査の結果わかったのは、子どもを取り巻く社会環境や暮らしの実態が予想通り非常に厳しいという事実でした。今年に入ってからは女性の地位向上と母子福祉に力を入れている「カンボジア女性協会」や政府関係者と、活動内容をいかに効果的なものにできるかの話し合いを重ねてきました。

内戦の影響で男手の少ないカンボジアは、その経済の担い手に女性を必要としています。このため政府は働く女性を保護する制度をつくり、職場に託児所を設けることを義務づけています。しかし現実には、政府から民間が肩代わりした工場経営者の手で、幼い子どもを抱えた母親が解雇されている事実が報告されています。政府の印刷工場の各工程で見受けたのは、ほとんどが子育てを終えた年代の女性でした。このような現実に対して、女性協会は第2回女性会議（1988.9）で「国は、出産、子育てをする女性の社会貢献を充分認めていない」との結論を出しています。

CYRは、カンボジアでの活動を進めるにあたり、カンボジア国内ですでに仕事の実績をもつ団体との共同作業を考えてきました。まず、地域ぐるみの子どもの環境改善には、専門を異にする各団体との密接なつながりと協調が必要となるはずです。ここでもカオイダンでの仕事と同様、主役は養成を受ける女性たちと、明日をつくる子どもたちです。

さて、CYRのプロジェクト・チームは、プノンペン市のはずれにあるミエン・チェイ地区を最初の活動の拠点に定めました。この地域は大半が近くの工場で働く貧しい人々の居住区です。ここを選んだ理由は、川沿いの湿地帯で住民の健康問題が多く、しかも子どもがたくさんいるからです。幼い

子どもたちは、母親や保護者が働きに出ると、面倒をみる人もないままで、1日を過ごします。

CYRはこの地域で、保育をふまえた福祉活動を始めるにあたり、プロジェクトに対する政府の許可を待っています。その間を利用して、来月からチームが地域の家庭調査を行ないます。その上で、家族が抱えているさまざまな問題に対応する相談員となる人3～5人を住民の中から選びます。養成はスパーパさんが中心になって、健康管理、出産、育児、看護、保健衛生、栄養食品、家族計画などの分野で6か月行ないます。これの始まりは10月中旬を予定しています。養成を受けた相談員は経験を積んだのち、新しい相談員の養成にあたります。

保育者養成、保育活動は、初めの相談員養成が終わった後、来年のなるべく早い時期に始める予定です。

さらに、この地域でのプロジェクトをモデル化して、都市部でのプロジェクトを、やがては農村地域にあうものに発展させる計画もあります。相談員や保育者が増え、経験を積めば、小規模でも子どもの施設があちこちにでき、子どもたちが安心して遊び、親も心配なく、働きに出られるようになるでしょう。

カンボジアの"水祭り"

栗野　鳳　(元カンボジア大使)

長崎に「ペーロン」と呼ばれるボート・レースがあるが、カンボジアにも同じ様なボートと、ボートレースがある。毎年11月初めに首都プノンペンの東を流れるトンレ・サップ川で行なわれる「水祭り」のときに、各州からチームがボートを持ってやって来て、レースが行なわれる。「水祭り」はカンボジアが「クメール王国」であった時代に、その王様が主宰する年中行事の一つであった。トンレ・サップの流れが雨期の終わった直後に逆流して、水は湖の方向からメコン川そして海への方向に変わる。逆流は、王様が水に向かって命令を下して、そうなるとされていた。その行事に仏教の儀式が取り入れられて、ろうそうをともしたり、お経が唱えられたりした。そして儀式が終わったあと、ボートレースが行なわれた。初めは2、3隻ずつのボートがトンレ・サップの流れを下りながら競争するが、最後には数十隻のボートがいっせいに集団をなして漕ぎ下る。中には、衝突して沈むボートも出てくるが、このレースは壮観であった。

そして、レースが終わるのは、日没に近い頃で、花火を合図に、イルミネーションをつけた飾り船がモーターボートに引かれて次々に動いていく。合計で十数隻になるのが常で、市民はトンレ・サップの岸にたたずんで、この船の行列を眺め、深夜まで立ち去らないでいた。

1960年代の後半には、こうした「水祭り」に、外交団のほか、ジャーナリストや技術専門家などの外国人も招待されたものである。

タイ被災村での保育施設への協力活動

ノンヤプロン村で教材づくりを教えるCYRスタッフ。

幼い難民を考える会では、数年前からカオイダンキャンプに近いアランヤプラテート郡の子どもたちの状況に興味を持ち、何度か非公式に訪ねていました。

なかでも被災村と呼ばれる、タイ・カンボジア国境付近の、カンボジアの内戦の影響を受けた人たちが新しくつくった村のことが気になりました。砲弾で村や畑を破壊されたり、戦闘が激しくて住み続けることができなくなり住み慣れた村を捨て、移住せざるを得なかった人々が住んでいる村です。これらの村にはUNBRO（国連国境救援機関）から食料の援助がありますが、ほかの村に比べて、生活状況は厳しいようにみえました。

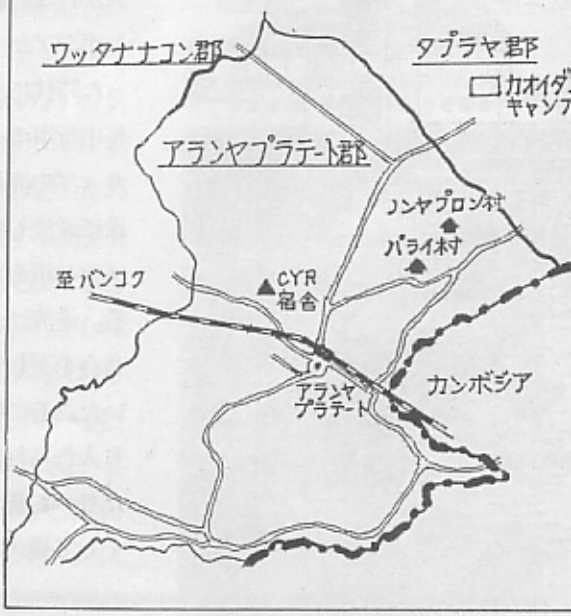
基礎調査は1988年から

この被災村で、CYRは1988年5月から3か月にわたり公式に基礎調査を行ないました。アランヤプラテートの地方局長から、被災村の中でも貧しい村を2か所紹介され、2週間に1度の訪問を続けました。調査の目的は、①村の子どもたちの状況と必要なものを把握する。②村人と親しくなる。③自立援助の内容と方法をさぐる　の3点です。

2つの村、パライとノンヤプロンは、それぞれアランヤプラテートの町から10キロと14キロ離れた所に位置しています。（地図参照）

村には公立の託児所が1つずつあり、その運営は村長、村長補佐を含む評議会が行なっています。保育者は、村に住む20代の若い女性で、アランヤプラテートの幼稚園で1回～4回の研修を受けています。この研修は軍の協力により行なわれるもので、1回は2日か3日で、教材づくりの実習や子どもの歌等を教わるそうです。保育園に来る子どもたちは、2歳～6歳で、朝8:00から夕方4:00まで過ごします。農業をしている親たち

CYRが協力をしている保育施設のある村
（プラチンブリ県アランヤプラテート郡北部）



パライ村

人口	114 世帯 676人
面積	3,250 ライ（ 5.2Km² ）
産業	米作、ピーナッツ・青豆・とうもろこし（飼料用）栽培、牛・豚の牧畜
公共施設	電気 74 世帯、保健所１、小学校１
保健	トイレの使用70%、簡易トイレの使用30%、飲料水は雨水、生活用水は池、井戸
教育	中学生１人、小学生 177人、園児35人

ノンヤプロン村

人口	53世帯、229 人
面積	3,200 ライ（ 5.12 Km² ）
産業	米作、ピーナッツ栽培
公共施設	電気 9世帯
保健	トイレの設置（18.8%）しかし未使用 飲料水は雨水、生活用水は池、井戸
教育	小学生35人（国境警備隊の学校）、園児15人

パライの託児所

子どもの数	20～25人
保育者	２人（20代の女性）、小学校卒、給与350 バーツ（１バーツ＝約 5.5円）と米100Kg
活動	絵をかく、数・文字を読む、ゲーム、歌、踊り
施設	建　物：コンクリートづくり、保育室、台所、倉庫、トイレ、机いす 運動場：広い、外遊具もある 教　材：本、絵の具、ブロック、楽器 その他：水浴び場、畑
飲料水	雨水をバケツに入れている
費用	月10バーツ（ 保護者負担）

ノンヤプロンの託児所

子どもの数	10～15人
保育者	２人（20歳）小学校卒、給与350 バーツと米100Kg
活動	文字を読む、歌、踊り
施設	建　物：木造（床コンクリート部分と木の部分）、台所、トイレ、倉庫 運動場：広いが外遊具はない 教　材：プラスチックおもちゃ、人形 飲料水：雨水をバケツに入れている その他：水浴び場、水タンク
費用	米か炭（保護者は現金を持っていないため）

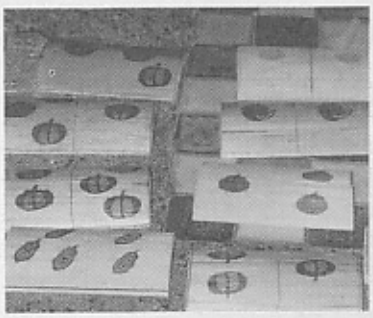
上：パライ村の託児所。下：ノンヤプロン村の託児所。

にとって託児所は、安全で、給食も食べさせてもらえ、託児料も安く、文字を教えてくれるということで、ありがたい存在となっています。

２歳以下の子どもたちは、祖母か母親が面倒をみています。母親が野良仕事に連れていくことも多く、年上の子どもがよく手伝っています。

子どもたちの栄養状態はあまりよくありません。これは親の栄養に対する知識不足のためと思われます。パライ村にある保健所ではまわりにあるいくつかの村を担当し、（ノンヤプロン村も含まれる）妊産婦検診、予防接種を行なうほか、患者の治療にもあたっています。最も多い病気は、発熱と下痢。また月に１回、助産婦は助手を連れて、健康状態の調査に各村をまわっています。

そのほかの調査の結果は、表の通りです。基礎調査の結果、２つの村に対し、保健教育や子どもの成長・発達を助ける教育が必要との結論をだしました。保育者は、家庭内で年長者が年下の子どもの



絵並べ遊びの、竹でつくった教材

世話をするように接しています。子どもの遊びも限られているので、もっと成長を手助けする遊びや教材が必要と思われます。

村人に保育への理解を

タイの村での活動なので、担当はタイ人がよいと判断しましたが、88年当時、適当な人材がCYRにいませんでした。

90年5月、農村開発の経験をもつプット・プットラットがCYRに入り、このプロジェクトが動きだしました。まず1年間の予定で90年8月から3か月を調査期間、その後も、3か月を1区切りとして評価、計画の見直しをしながら保育者養成を行ないました。

調査結果からもわかるように、パライとノンヤプロンでは、託児所の状況がかなり違います。初めの3か月は2つの村の託児所で同じトレーニングを行ないましたが、水準が違いすぎて無理があったようです。トレーニングの内容は次のようなものです。

はじめに、子どもの発達についての講義。しかし、保育者はあまり興味を示しませんでした。小学校を卒業しただけの教育水準とも関係があると思われますが、給料が何か月も遅配することがやる気を失わせているようです。

実習の教材づくりや、おやつ・料理づくりには、保護者や地域の人たちの参加も呼びかけました。これは、子どもたちにとって最も身近かな人的環境である親やまわりの大人たちに、保育への関心をもってもらうためです。

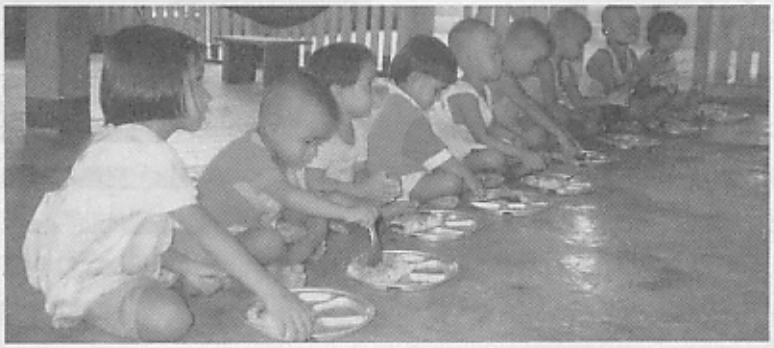
しかし、村人は畑仕事で忙しく、時間がなかなかとれないようです。また、「被災村」はいろいろな所から集まってきた人々で構成されているため、お互いのことをよく知りません。これらの理由により、あまり多数の参加は得られませんでした。

このようなむずかしさもありますが、少しずつ託児所への理解と協力は増しています。今後の計画としては、今までの教材づくり、おやつ・料理づくりを続けるとともに、次のことを新しく始めます。

1　井戸掘り……村は水不足で、とくに乾期中は子どもに充分な水がありません。

2　野菜の栽培・養鶏……子どもたちに野菜を育てることを教え、給食の材料としても使え、保育者の収入源にもなると思われます。保育者の給料があまりにも安すぎ、意欲をなくしているからです。

3　託児所内に情報コーナーをつくる……新聞、雑誌、本を置いて、自由に村の人たちも利用できるようにし、託児所への関心を高めたいと思っています。



上：パライ村の園庭で遊ぶ子どもたち　下：ノンヤプロン村の託児所での食事風景

シビカ・プラコブサンティスク（ゴイ）　バンコクのスタッフになって5年目。大学の専攻は考古学。政府関係の仕事はきらいと、NGOで働くことにした。本を読んだり、あちこち旅行をするのが好き。飛行機なんてちっともこわくない。誰とでも気持ちよく話ができる。趣味のよい、流行の先端をいく服装をしている、CYRのベストドレッサー。他のスタッフをあらゆる方面で助けてくれる存在でもある。報告書や計画づくりを手伝ったり、悩みごとを聞いてくれたり……。役職はリエゾン・オフィサー。渉外を担当している。

◀ゴイ

▶ピアップ

カンポイ・トングナム（ピアップ）　家はタイ東南にあるスリンの農家なので、農繁期には休暇をとって手伝いにかけつける。CYRのスタッフとして6年目の最古参。カンボジア語はカオイダンキャンプのカンボジア人より上手（？）かもしれない。いつでも、どこでもほがらかでやさしい。着るものの好みはうるさくないが、なんといってもサロンがいちばん。カオイダンキャンプで織物と洋裁の指導者兼デザイナーをしている。また、CYRの全スタッフにとってのよき“母親”でもある。

プリスナ・ナリンラム（プリスナ）　タイ東南、スリンの隣のブリラム出身。生まれたときからカンボジア語を話していた。大学では教育心理を専攻。とにかくしゃべることが大好きで、誰とでも、何についてでも話す。宿舎で飼っているネコとも親子の会話を交わしている。カオイダンキャンプでは保育を担当して2年目になる。

在タイスタッフ紹介

左からレック、上田、湯山、プット、プリスナ。

プーンサワット・ソムブンポン（レック）　CYRの数少ない貴重な男性スタッフ二人のうちの一人。家はアランヤプラテートにある。小さいときから働いてきたので、きつい仕事でもだいじょうぶ。何もすることがないと耐えられない性格。衣食の好みはとくになし。木工とかご作りの担当もしているが、本職は運転手。

プット・ブットラット（プット）　もう一人の男性スタッフ。スリン出身。大学で考古学と地域開発を専攻した。それがどうしてCYRに入ったのか、本人もよくわからない。自分に対しても、他人に対しても、とにかく楽しく過ごすことを追求する。自由と公平さのある仕事、職場が好き。カオイダンキャンプでは何でも屋で、他のスタッフの手伝いをしているが、本当はタイの被災村の仕事の担当。CYRに入って2年目。

上田広美　語学への興味とセンスは抜群。相手によって、カンボジア語、タイ語、英語、フランス語、日本語と使い分ける。しかし語学と仕事以外のことは何もしたがらない。買い物も旅行も映画も眼中にない。学生時代から東京事務局でアルバイトをしていたが、卒業と同時に職員に。研修で行ったタイの仕事がおもしろくて、カオイダンキャンプの仕事を始めて3年。現在はフィールド・コーディネイター。ときどきタイ人スタッフから煙たがられている。

湯山佳代　大学では社会福祉を専攻。1度働いてから大学に入ったがんばり屋。タイに来て1年、パナニコムで4か月研修をしてからカオイダンキャンプに来た。母親教室と小学生の活動の担当で、保健衛生や応急手当てについて教えているのに、なぜか自分はいつも身体の調子を悪くしている。自分の好み、主義、主張にこだわる。

☆このプロフィールは、書くことが好きなプットがまとめたものです。（　）内は愛称。訳／上田広美。一部編集部で追記しました。

全員がつくるCYRの未来

去る6月30日、幼い難民を考える会の第11回定期総会が開かれました。午後の部は「話し合おうCYRの未来」というテーマで、参加者が自由に意見を交換する機会をもちました。出席者は、30名弱と少なかったのですが、いろいろな意見をいただくことができ、今後の活動を考える上で、大いに参考になりました。そのいくつかを紹介しましょう。

＜活動の対象者＞

―― 日本国内での活動、タイの村での活動、これから始まるカンボジア国内の活動、などは対象者が「難民」ではありません。対象者についてどうお考えでしょう。

・「難民」にこだわらず、広げていってかまわない。

・CYRの基本は「幼い子ども」と「難民」の2つの柱。10年以上経てば、活動対象が広がっていくのは自然。

・「幼い子ども」に着目したところにCYRの独自性があり、魅力がある。「幼い子ども」という視点から地域活動に広がっていくのは自然な形だと思うが、あくまで「幼い人」にこだわり続けていってほしい。

・CYRは保育の経験があるので、ほかの国々にも援助してほしいという依頼もあったと思う。しかし、1つの場所で長い目でみた活動をしてきたのが特徴であるし、よい方針だと思う。これからも地道に活動を広げていってほしい。

・国連などが定義する「難民」に限らず、文字通り「苦しんでいる人、困難を抱えている人」と考えてよいのではないか。

＜援助について＞

・カンボジア以外の国の援助も考えてほしい。

・世界中のかわいそうな状態にある人たちには手を貸さないのか？

――同情はよいと思うが、同情だけではいけない。援助される側にとって本当によい援助なのかどうかいつも考える必要がある。

・パレスチナ、インドなど手をさしのべたい所はたくさんあるが、1度援助を始めたら、途中で止めることはできない。きちんと見通しを立ててからかかわらなくてはいけない。

・「援助はもういらない」と言われる時こそ、私たちの目標が達せられる時だ。

＜ボランティアについて＞

・ボランティアをする以上、ボランティアのプロであってほしい。

・CYRがボランティアの養成を行なっていってほしい。

・ボランティアの登録をするとよい。

・「ボランティア」というと日本では責任をもたなくてもよいように誤解されがち。専門を持った人たちにも、もっとボランティア活動で能力を発揮してもらいたい。

・「ボランティア」はだれかに頼

まれるてやるのではなく、自分の意思でやること。できる範囲のことで積極的に参加していただきたい。

<会費について>

・小さな会をつくっているが経済的に苦しい。CYRがなぜ10年以上も会費月 500円でやってこられたのか知りたくて最近入会した。

・今まで何回も会費値上げの件は出ている。そろそろ上げてもよいのではないか。

このほか、「バザーに代わる収益事業」「地域でできること」などについても話し合いたかったのですが、残念ながら時間の都合で果たせませんでした。しかし事前に、何人かの会員の方から「チャリティ・コンサート」の企画が出されていますので、コンサートは今秋以降実現したいと考えています。

そのほかにもアイディア、ご意見などある方はぜひ事務局までお寄せください。これまでにも、学習会・パネル展・報告会・料理会の催しや、リサイクル運動を通じての収益金の寄付、ホームステイの機会をつくるなどがありました。会員の力でCYRの未来をつくる運動にできるよう、お気軽にご連絡ご参加ください。

縁の下の力持ちに TOYP大賞

幼い難民を考える会の事務局長峯村理香が、社会的に大きな貢献をし、将来性のある若者に贈られる“TOYP大賞”および特別賞として外務大臣賞を受賞しました。

TOYP大賞は、日本青年会議所が5年前に創設した賞で、政治経済、学術、文化、芸能、スポーツなどあらゆる分野で活躍し、社会的な貢献をしている若者10人を全国から選び、表彰する制度です。

今回の授賞は、幼児の健全な成長と基本的人権の擁護に焦点を当てた「幼い難民を考える会」の活動を、事務局スタッフ、事務局長として7年間陰で支え、発展させたことが評価されたものです。

国際協力というと、海外での仕事にばかり目がいきがちですが、現場が安心して働くためには資金や人材の確保、広報など欠くことができません。こうした地味な仕事はあまり一般には知られず、なり手もあまりいないだけに、今回このような形で評価を受け、受賞したことは峯村個人にとどまらず事務局全体としても非常に励みになります。同時に、社会的責任も一層重くなったことをひしひしと感じています。

受賞後、峯村は、「今回受賞できたのは、たくさんのボランティアの方々が、事務局を支えてくださったからです。この賞は、ほんとうはボランティアの方たちにさしあげるべきだと思うんです。」と語りました。

正に、真の「縁の下の力持ち」はボランティアの方たちなのです。紙面を借りてあらためてお礼申しあげます。

ベトナム人と友だちに なりたい人へ

8月25日(日)

14:00 ～ ベトナム語のミサ

15:00 ～ 集いと交流

会場 荒川区南千住 ひろば館

交流会は毎月一回行われます。くわしいことは次の所にお問い合わせください。

〒116 荒川区南千住6-32-10 友の家 (篠崎) ☎03－3801－2488

希望の家レポート

●上級洋裁コース開始

将来カンボジアに帰ってから、自分で仕立屋が開けるくらいの技術を持つ人を養成するのを目的に今年1月から、洋裁教室に上級者コースを設けました。1コース3か月で、採寸、型取り、裁断を重点的に教え、子ども服、ブラウス、シャツ、ズボンなど14種類、約30～40点を製作。ミシンの手入れや、簡単な修理も週1回教えるようにしています。希望者が多かったのですが、ミシンの台数の関係で15名にしぼらざるを得ませんでした。

クラスが始まってからも全員が真剣に製作に取り込み、出席率もほぼ100パーセントでした。

●手工芸品プログラム始まる

帰還準備の一つとして、国に帰ってからの収入向上につながる手工芸品の製作プログラムを4月から始めました。

バンコクからタイ人講師を招いて、バナナの幹の皮と水草を使ったかごあみの講習会を、織物、木工、保育のワーカー15人を対象に3週間行ないました。やわらかいので、あまり力もいらず簡単に編めるので、子どもでも、お年寄りでも作れます。でき上がりは、バナナの木のほうがきれいで、入手も簡単です。

講習を受けた人の中から指導者を養成し、外部からの生徒を募集する予定です。

●保育園の保護者の期待は？

3月の保育者のミーティングの時間は、家庭訪問を行ないました。保育者は、その子の保育園での様子を親に話したあとで、いくつかの質問を用意して家庭での子どもの様子を聞き取り調査しました。

その結果、親が子どもを保育園に通わせるいちばんの理由は、小学校へあがる準備だということがわかりました。人見知りをしなくなるように、社会性を身につけられるように、友だちと仲良く遊ぶことができるように……というのが、親が保育園に期待していることのようです。また家を清潔にしている保護者は、子どもの服装もきれいにしていること。母親の身なりがきれいでも、家の中がきたないと、たいてい子どもの服もきたないこともわかりました。

子どもが病気になったときは、キャンプ内にある西洋医学の病院にほとんどの親は連れていくようです。

●背丈以上に伸びた桑の木

乾期の3月には雨がまったく降らず、井戸も涸れてしまい、水をやることができなかったため、元気だった桑も、さすがに葉が茶色くなってしまいました。このままでは枯れてしまうと心配していた桑の木ですが、今年はどうも異常気象のようで、4月というのに雨が何回か降り、生き返りました。普通なら、4月5月は1年中でいちばん暑く、雨も降らない乾期の真っ盛り。恵みの雨に、桑の木の背はずんずん伸びています。

ご協力ありがとうございました

クルド難民・湾岸戦争被災民募金

CYRも参加している「クルド難民・湾岸戦争被災民NGO合同委員会」（以下NGO合同委員会と略、今年4月発足）は、クルド難民、湾岸戦争被災者への救援活動のための募金を5月にお願いしましたが、6月末現在約500万円が寄せられました。ご協力ありがとうございました。

NGO合同委員会では、6月11日から22日までの12日間、どのような救援活動が望まれているかを調査するため、イラン国内のテヘラン州とバクタラン州に、医師の高橋央氏（アジア医師連絡協議会）を派遣しました。

調査の結果、バクタラン州に約100万人いたクルド難民のうち、半数以上が5月末までにイラクへ帰還。飢餓状態も脱し、伝染病も少なく、救急医療の必要性もあまりないことがわかりました。ただし、残っている難民たちに帰還の意思がないため、長期化が予想されます。イラン政府としては、教育、生活基盤の改善事業など、長期滞在につながるプロジェクトは望んでいません。そのためNGO合同委員会では、当面の問題である越冬対策にしぼって「保健衛生および越冬対策に関する教育ビデオ」を作成するプロジェクトを、決定しました。このビデオ作成のため、7月下旬から3か月の予定で3名を派遣します。

BOOK GUIDE

張振海という人を覚えていますか？　中国で天安門事件が起きた1989年。その年の12月、日本の福岡空港に中国民航機が緊急着陸しました。天安門事件に積極的にかかわっていた張振海氏は、中国の迫害を恐れ、3度、陸路、海路での国外脱出を試みましたが、いずれも失敗したため、中国民航機をハイジャックし、国外脱出をしたのです。張振海氏は南朝鮮への着陸を要求し、最終的には台湾に政治亡命するつもりでした。しかし南朝鮮側が着陸を拒否したため、中国民航機の機長が福岡空港に緊急着陸し、事件は日本を巻き込むことになったのです。

この「張振海ハイジャック事件」は、前半が張振海氏の証言に基づく事件までの経緯、後半が張振海氏にかかわった弁護団7人による

座談会の2部構成になっています。

ハイジャックという重大事件であるだけに、はたして本当に政治犯罪なのかどうかが最大の問題です。弁護士たちは張振海氏と話合いを重ね、中国の歴史を調べ、海外にいる証人をさがしていくほど政治亡命であるとの確信を深めます。この座談会で語られる、張振海氏の人物像、日本と外国との人権に対する意識・行動の違い、約4か月の短い期間に弁護団が行なった実に様々な手続きと訴えなど興味深く、弁護団の苦労の一端がうかがえます。

1990年4月28日、張振海氏は中国側に引き渡されました。日本政府は、ハイジャックの犯人だからという理由で、政治犯罪者としての保護を受けられないことはやむを得ないと判断したのです。

「本件は日本の政府、裁判所、さらには国民の人権感覚が問われた事件である。」（弁護団長　伊藤和夫氏）――難民問題、外国人の人権を考えるきっかけになる1冊としておすすめしたい本です。

「張振海ハイジャック事件」
張振海事件弁護団編
日中出版刊・1545円

春の日差しがまぶしい4月14日、日曜日、神奈川県平塚市立横内小学校体育館にて、カンボジアのお正月を祝う会が行なわれました。主催は横内団地カンボジアの正月実行委員会（会長／サムレット・シーワントー氏）。横内団地連合自治会（会長／田中数政氏）と、幼い難民を考える会が協力をしました。

当日の出席者は約500名。地元神奈川県を初め関東一円から、カンボジアの人たちが、家族や友人たちと集まりました。はるばる山口県から2人のお子さんを連れて出席した女性は、「近くにカンボジアの人がいないので、日頃、懐かしい故郷の文化・習慣に触れる機会がなかった。今回、是非参加して子どもたちに1度、カンボジアのお正月を見せたかった。」と話していました。

また、団地のカンボジアの人たちが多く通う、横内小学校、横内保育園の先生方、神奈川県内のボランティアグループの方々、そしてCYRの会員と、多くの日本人も参加してくれました。当日の朝早くから、料理の盛りつけを手伝いに来てくれた普段着の御婦人は、「奥さん、どうして今日は、そんなにおしゃれしているの？」と質問。「だって、今日は大事なお正月だから。」「あっ！　そうか。」

毎日顔を合わせていても、互いの国の文化や習慣についてはなかなか知り合う機会がないものです。カンボジア女性の美しい正装を初めて目にした御婦人は、“お隣のカンボジア人”について、またひとつ、新たな印象を持ったことでしょう。

さて、カンボジアのお正月といえば、まず、お坊さんの読経と砂山の儀式です。細い竹の柄のついた長いお線香にそれぞれの願いをこめて、大きな砂山にさしていく神聖な儀式は、カンボジアの人たちにとって、とても大切なものです。そして、その儀式のあとは、あめでたい新年のお祝いです。お祝いとくれば、やはりご馳走、そして、音楽と踊りでしょう。しかし、ご馳走は、楽しみな分だけ準備が大変です。今回のお正月もたくさんの人たちに喜んでもらうために、横内団地のカンボジアのみなさん、自治会の方たちは、徹夜で準備をしました。お料理は女性だけでなく男性も大活躍。揚げても揚げてもちっとも減らなかった鳥のから揚げも、切っても切って

スースダイ・チュナム・トゥマイ！

（新年おめでとう）

もなくならなかったキャベツを使った鳥サラダも、あっと言う間にみんなのお腹にはいり、「おいしい！！」と喜んでもらえました。

さて来年は、どこでこのおいしいカンボジアのお料理を食べられるのか、今から楽しみです。

横内団地のみなさん、楽しいお正月をありがとうございました。

（記／山崎尚枝）

横内団地カンボジア人会が雲仙募金

この春、お正月のホスト役をつとめてくれた神奈川県平塚市の横内団地のカンボジアの人たちが、7月には長崎の雲仙岳被災者へ義援金7万円を送りました。

「ニュースなどで島原の人たちが困っていることを知り、有志が出し合いました」とカンボジア人会代表のリー・ルームさんは話しています。

日本人でも、気持ちがあっても、なかなか実際にお金を送るところまでいかないものです。やはり、難民として苦労した経験が思いやりにつながるのでしょうか。私たちも見習わなくては。

CYRイベント事情

藤森　淑子

私、自称CYRのイベント屋。とはいっても、今までにできたことは3月の科学技術館ツァーと、5月のベトナム料理会の2つだけ。まだまだ未熟なイベント屋ながら、夢だけは大きく持っております。それは、最低でも月に1度はひとつ企画を実現させること。だれでもが楽しめる、なるべく多くの人を動員できる内容にすること。こうすることによって、東京近郊のインドシナの人たちと楽しく交流ができ、おまけに会員でない方々への良いCYRのピーアールにもなる訳です。

そうは言ってみても、今までの様子を知らないことにはイベントの誘いがきても、乗り気になってはもらえないでしょうから、とりあえず内容報告しておきましょう。

3月21日、科学技術館ツァー。この日は祭日ということもあって子どもを中心とした約20人が集まりました。午前中は館内見学をし、お弁当のあとは、北の丸公園を散歩しながら千鳥が淵まで行って、ボート遊びをしました。少し肌寒い日でしたが、元気いっぱいの、子どもたちのエネルギーを分けてもらいながら、ゆったりと過ごすことのできた春分の日でした。

5月12日。ベトナム料理会。　埼玉にお住まいのレ・バン・タムさんご一家を講師に迎えて、今度もまた20人ほどがベトナム料理に挑戦しました。

この日のメニューは、鶏肉入りサラダ、揚げ春巻き、カニ玉団子のトマトスープの3品目。さすがにエスニック料理ばやりのおかげで、春巻きなどは、食べたことがあっても、まさか里芋を使うとは思いもしなかった人が多く、食を通じて多少なりともベトナムの文化に触れることができて楽しく、おいしい料理会でした。

以上のように、今後もタイプの違うイベントを含めて、いろいろな企画をしたいと思っていますので、ご期待ください。ただし、当方夢はあれど未熟なイベント屋ですから、良いアイディアが不足しがちです。素晴らしい企画をお持ちの方、いつでもお待ちしています。ご連絡は、事務局あるいは私の自宅にお願いします。（会員名簿をご覧ください）

工場で働く10代の女性たち

東京都
港区

奥村少枝子

今年の5月の連休に、微笑みの国「タイ」へ行きました。友人、従姉、妹、私の女4人、それぞれ夫と子どもに留守番を頼んで……。友人と私は自営業、あとの2人も忙しい身。やっと時間をつくって久々の旅行ということで、義兄が1年のうち3分の2住んでいるタイへ出かけたわけです。

日数が限られていましたので、ただの観光旅行でしたが、半日だけ、義兄がコンサルタントをしている現地の缶詰工場を見学する機会に恵まれました。タイではいちばん大きな魚の缶詰工場だそうで、日本やヨーロッパ向けのもの（一部はキャットフード）が作られているとのことです。300人位の工員のほとんどは、日本でなら高校生位の年齢の女子で、蒸風呂のような暑さと、むせ返るような魚の臭いの中で、ベルトの上に次々と運ばれてくるマグロやカツオの身を選り分けたり、細かくほぐしたり、製品になる前に重さを計ったり、さかんに働いていました。見学は1時間ほどでしたが、私は暑さと臭いに閉口し、しまいには汗でお化粧もはげ、まだらの顔でフラフラでした。多分、何十年か前の日本の工場の姿も同じだったのでしょう。私たちの国も同じ様な時代を経て、現在に到っているのだと思いますが、すべてがオートメ化されている現在の私たちには考えられないような環境の中で、現に仕事に従事している若者たちがいるのです。ナイトバザールには、家族の生活をその肩に背負っている、まだ童顔の女性たちがいるのです。私たちの行った場所は観光地のため、比較的生活状態のよい所だと思いますので、この程度でショックを覚えるようではまだまだと言われるかもしれません。

それにしても、一方では他国を訪問し、自国との生活状態の格差に驚いている私たちがいて、一方では飢えに飢えて、5歳以下の子どもたちが1時間毎に1,500人も死んでいる（犬養道子著『人間の大地』より）状況がある。何と矛盾していることか！　何とかならないものか！　という思いで一杯になります。具体的には、何をしたらよいのでしょうか。でも今の所は、何の取り柄もない平凡な主婦としましては、「幼い難民を考える会」の雑用の手伝い、または少しばかりの寄付ぐらいでしかお役に立つことはできないと思います。これからも自分の範囲内で参加させていただきたいと思っております。

工場で酷使される少年の物語「サムルーン」より

気になる子どもたち

青森県
下北郡

能戸しず子

カンボジアの子どもたちの写真を見ると、生き生きと明るく、とてもかわいい子が多いです。私たちにない底抜けに明るいカンボジアの子どもを見るとうれしくなり、

力強さを感じます。

私は、保育所に勤めていますが、保育所の子たちは、ほとんどの子が大切に育てられているように思います。でも、何か子どもにとって大切なことが忘れられていることを感じます。ひとつには、保育所の、保育のあり方にもあるのでしょう、かがやくような明るさを見出したいと感じています。

中2の息子にカンボジアの子どもの絵はがきを見せて、かわいいでしょう、こういう子の保育をしてみたかったと言うと、頭をかしげて、不思議そうにしていました。息子は、私に今すぐにでもタイに行かれたら、自分の生活に影響するので何も言わなかったようです。最近気付いたことで、小さい子、弱い人へのやさしさなどに欠けているのではないかと育て方の反省をしているところです。

カンボジアの子の写真の中で、6歳ぐらいの男の子が1～2歳の女の子を抱いているを見て、遠い昔、私が小さな子どもだったころ兄に抱かれていたころとだぶって見えました。

自分の子もきちんと育てられないのですが、人の子、それもいちばん大切なとき、いちばんかわいいとき、そして、世界中の悲しい立場にいる子どもたちのことが、気になって仕方がないのです。すぐに行って、手を貸したい気持ちはあっても、身動きとれない立場で何ができるでしょう。ほんの少しだけれど、できることから始めていこうと思うのです。

を置いた考え方、それが残り少ない私の人生に灯をともしてくれました。それが、たとえか細い灯火であったとしてもである。これからも生きている限り、平和のために役立つ人間でありたい。そのことを教えていただいたのが「CYR」です。

人間は何のために生きていくのか。この永遠の課題にほのかな光が見えてきたように思います。21世紀の文明は奉仕の文明だという。日本は孤島だから、自然、鎖国になりやすい。今までの日本は、他人のふところに手を突っ込んで自分は閉鎖。居心地よい日本。これを平和というのだろうか。でも、このぐうたらぶりでは決して通用しないでしょう。吉川英治の色紙に「吾以外皆師」というのがあります。みなさんから教えられながら、私の道を歩んでいきたいと思います。

大切な言葉

東京都
東村山市

山田敏光

この世でいちばん大切な言葉は何か。そんなことを土台にして、たった一語を選ぶとしたら何を、と一国語学者が考えました。そして、その答えを、「あう」と断定しました。逢う、会う、合う、遇う、遭う、相う……。そういえば私の過去の道筋においてなんとたくさんの「出逢い」があったことか。「CYR」との出逢いは、私のライフワークを変えました。狭い、ミクロ的考えでないのが共鳴できるのです。別の言葉で言えば非常に気に入ったのです。人間の生命なんて泡沫の一片に過ぎない。「幼い難民」というところに視点

原稿大募集!!

会員登場に原稿をお寄せください。すすめたい本、現在やっていること、仲間の募集、勉強していること、疑問に思っていること、会への希望その他何でも。

横書き、15字詰で書いていただけると助かります。字数は600～800字程度。顔写真もお願いします。

保育園の交流会でチャングチュムを踊る子どもたち。

地域にアジアとのふれあいの場を

―――――― アジアハウス

単に行事のときだけではなく、日常生活の中でじっくりアジアとの交流を深めることはできないか。アジアの人と私たちが人間として等しく生きていくためには、何をどうすればよいのかを考えていく場をつくれないか。そういう環境の中でこそ、社会を見る目をしっかり持った子どもを育てていくことができるのではないか。――大阪市生野区で保母として働く重慶子さんと中岡三津子さんは、何年もそんな思いを抱きつづけていました。

そして数年前、アジアから日本にやってくる就学生は何の生活保障もなく、住まいさがしに苦労し、物価高のため、食費を切り詰めざるを得ない生活をしていることを知りました。重さんたちは日本人との交流の場ともなるアジアの就学生のための寮がつくれないものかと考え始めました。

大阪市生野区には在日の朝鮮・韓国人がたくさん住んでいます。重さんたちが働いている保育園も、在園児の70～80パーセントが在日朝鮮・韓国人の親を持つ子どもたちです。こういう現実であっても重さんが勤め始めた15年前までは“日本人”として育てるための保育しか行なわれていませんでした。園側への粘り強い働きかけの結果、ようやく朝鮮・韓国の歌、遊び、踊りを保育にとりいれることに成功。11年前からは、運動会の中で、「世界の子どもたち」の生活や文化にふれる機会をつくってきました。それでも、行事が終わると、交流もなくなってしまう、という不満は残り、保育園の中でやることの限界を感じたようです。

1989年5月、重さんたちは、アジアの就学生向け寮の建設を呼びかけました。

「この建設を通して、地域の子どもたちが自分たちの暮らしや社会を見つめ直し、自分たちで行動していけるような取り組みをしたいと思っています。子どもたちは、この地球の上で同じ空気を吸い、運命を共にしている存在です。彼らは、大人から社会に立ち向かうすべをあらゆる面から学ぶ権利があるし、私たちは教える義務があると思います。

今、日本を初めとする先進国の企業のアジア進出により、自立経済を破壊されたアジアから、就学生、出稼ぎ労働者が多数日本に来ています。企業は非合法にアジア人労働者を最底辺の労働力として利用する一方で、露骨な差別が広がっています。こうした人たちにとって、日本での最初の出会いが良いものであってほしいと願わずにはいられません。

ここ「国際都市・生野」は、朝鮮・韓国人と日本人がいっしょにつくってきた町です。そうした歴史を財産にして、アジア人就学生向けの寮を建設したいと思っています。」（趣意書より）

「アジアハウス建設準備会」が発足したのが、同年11月。その準

備会で、就学生の寮と、障害児との共同保育を行なう学童保育所、食事の店、の3つを「アジアハウス」の中に盛り込む骨組みができました。8,000万円という、気が遠くなりそうな金額を目標に、資金確保の活動、募金活動も本格的に始動しました。

そして1991年、1階を地域の子どもたちと就学生との交流の場とする学童保育所と食事の店に、2階から4階を4畳半から6畳の部屋10室の就学生の寮にする設計図が完成。去る4月には、400人以上の市民からの出資金・カンパが4,500万円を超え、延べ220平方メートル、4階建ての「アジアハウス」の着工にまでこぎつけました。

と言って、今どき4,500万円では、とても土地代、建設費用はまかなえません。必要経費は、当初の予想を上回り、1億円以上。銀行からの融資そのほか、集められるだけのお金をかき集めてもまだ1,500万円が不足。建築も基礎の部分だけを専門家に、壁面や内装

建設中の3階建てのアジアハウス

はボランティアを募って完成させようという苦肉の策をとっています。地域の人たちを中心に、たくさんのボランティアにより「アジアハウス」は、第1期工事を終えました。しかし、第2期工事に入るにはお金が足りず、まだ目処がたっていません。

文化の違いを認めながらその違いを越えて、障害があってもなくてもその違いを越えて、同じ人間として付き合いたい —— そんな願いからアジアハウスの建設は進められています。1日も早い完成のために、アジアハウスでは会員（月額500円）、出資者（5年間無利子）、カンパ、大工仕事をしてくれる方を募集中です。

郵便振替　大阪8-113377
アジアハウス

詳しくは、大阪市生野区中川東1-6-10 ☎06-758-6205　アジアハウスまでお問い合わせください。

5月に、バングラデシュで20年近く活動を続けている民間団体「シャプラニール」のサイクロン救援募金のチラシを送らせていただきましたが、シャプラニールから、中間報告が届きました。その報告によりますと、5月4日に開始したサイクロン救援募金は、6月20日現在6000万円の大台を越えたそうです。

今回のサイクロン被害は、テレビ、新聞でもずいぶん取り上げられたので、報道を見て送金した人だけでも数千人に達したようです。

ご協力いただいたサイクロン救援募金は6000万円を越えました

シャプラニールでは、この募金を今回もっとも被害の大きかった被災地の1つ、チョコリア郡（全死者数の12パーセントを占める）の緊急救援に当てました。今後はひとつの村にしぼって、その村の全教育施設の再建と修理という復興支援にあてる予定です。そのための引き続きの支援を、シャプラニールでは呼びかけています。

郵便振替　東京4-133937
口座名　シャプラニールサイクロン

僧侶が歩けば・・・・・ その3

——タイ、カンボジア行脚の旅

渋井　修

1990年5月13日

朝6時に、外務省の外国人用宿舎を出て、お寺に行って食事をする。ちょうど私の横に若い坊さんがいて、「ニーモン」とタイ語で声をかけてきた。タイの坊さんで、ノービザで入国したという。軍の検問も、坊さんは調べない、と自信ありげに言った。カンボジア語のわかる年配のお坊さんと二人で来たという。

食後、この年配のお坊さんに通訳してもらい、カンボジアの年寄りの坊さんと話した。この寺、ポルポト時代（1975年～79年）以前には、500 ～ 600人の坊さんを抱える一大総本山であったそうだ。しかし、ポルポトが政権を握ると、仲間の坊さんたちは次々に殺され、今いるのは年寄りばかりで、その数も20人くらいとのことだった。建物はいっぱいあるので、今は一般人が住みついていて、管理しているそうだ。

外務省の役人のオッサンが、呼んでいるので、ひとまず宿舎に帰ることにした。今日は王宮を見に行くそうだ。その王宮は、宿舎のすぐ前にあり、風貌は、タイのそれと非常によく似ている。しかし、タイの王宮のようなケバケバしさはなく、質素で落ちついた雰囲気があり、日本人の私には、こちらの王宮のほうが親近感がもてる。

一通り見てから、オッサンが、プノンペン山で祭りがあるから行こう、と誘ってくれた。市内にある小高い丘で、上には寺があった。私たちが着いた時には、儀式が終わっていて、上から坊さんたちがバーツを下げて、下で待ち構えている信者のほうへと階段を下りているところだった。150 人くらいの信者は、それぞれご飯やおかずを、お坊さんに供養していた。私たちがその光景を人垣の中で見ていると、オッサンの知り合いの信者が近づいてきて何かたずねた。きっと、どこの坊さんかね、とたずねたにちがいない。するとオッサン、でかい声で“日本の坊さんだ”なんて言うもんだから、まわりにいた人たちがいっせいにこちらに振り向いた。そして、一人の信者がお金を差し出し、私のずた袋に入れたら、我も我もとまわりの信者がお金を入れ始めた。群衆心理は面白いものである。一人そうすると、もう止まらない。昼食後、いただいたお金を勘定してみた。しめて4639リエルあった。国民の月の平均収入は、3500～4000リエルだそうだ。

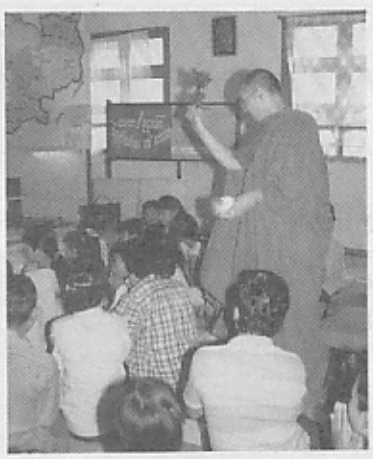
午後から行った所は、学校だった。すぐに小学校の女の子が花束をもって出迎えてくれた。まさか、いきなりこういう歓迎を受けるとは思ってもいなかった。校長先生にいろいろと説明を受けた。生徒児童は 280人いて、この子どもたちは、両親のいない戦争孤児だそうだ。1980年くらいには、今の10倍以上の人数がいたそうだ。この学校では、子どもたちに勉強を教えると同時に、職業訓練も行なっているのだそうだ。その織物、手芸、木工などの訓練風景を見せてもらった。

さらにいくつか教室をまわって

別の部屋に行くと、子どもたちが40〜50人、床の上に座っており、机の上にはナムモン（水をかける儀式）用の道具が用意してあった。子どもたちから贈り物を受け取って、すぐに経文を唱え水かけの儀式をした。私の経文を唱える声がきこえたのでしょう。先生たちがあわてて入ってきた。すでに儀式は済んでしまっていたが、せっかく来たので、もう1度やった。水をかけてもらっている時の先生、子どもたちの表情は明るく、目を輝かせていた。ここでもタイ同様に、僧侶によせる期待は大きいようである。

5月15日

プノンペン西側に位置している寺に行った。寺のすぐ脇は学校になっており、ちょうど授業が終わったばかりで、生徒たちが外に出てはしゃぎまわっていた。プノンペン市内の学校はほとんどが寺と隣接してあり、寺が教育の一端を担っていたことがわかる。これは、多分地方に行っても同じであろう。お堂は実に立派な建物で内戦前には、たくさんの坊さんがいて、たいそうにぎわっていただろうと思われる。案内されたクティ（僧侶の部屋）は、ただっ広い体育館を思わせるような建物で、中には7人ほどの坊さんがいるだけであった。いずれも年寄りばかりで、簡単なベッドと蚊帳と身の回りのものがあるだけの、質素なものでした。外務省のオッサンが入口近くの坊さんを紹介したのですぐにひざまずいて合掌して三礼しようとしたら、すぐに私の手を取って、“いいですよ、そんなことしなくても”という態度で、椅子をすすめてくれた。カンボジアの坊さんのこのような態度に、これまでも何回も出会った。もしこれがタイの大きな寺の坊さんだったら、決してこのような態度に出なかっただろう。タイでは、パンサー（安居）をどのくらい過ごし、パーリ一語を何級とったかが、その坊さんの僧階に影響するので、それ相応の地位にある坊さんは、おのずからそれ相応の態度を示すのである。しかし、ここではそれがない。坊さんにとって、高慢な態度など必要のないものなのだ。だから、



私がカンボジアの坊さんと会う時には、全然身構える必要がなく、気楽に、まるで初対面なのに、友だちに会うようなつもりで接すればよいのである。これは、とても重要なことだと思う。タイでは、僧団としての組織化、系列化、階級化が進み過ぎて、どうも私には窮屈な感じがしてならないのです。それと、カンボジアの坊さんのこのような態度は、ポルポトによる虐殺で、僧団自体が壊滅の危機に瀕した苦い経験があるからかもしれない。何か、古い垢を削ぎ落として、新しく生まれ変わったような気がする。

〈筆者プロフィール〉

演劇、農業の経験を経て仏門に入る。87年7月タイに渡り得度。ベトナム戦争の頃、多感な青春時代を過ごした筆者は、非業の死を遂げた何百人もの人の霊を弔うため、インドシナに行くことを決心。

タイのパクナム寺院を拠点として、89年12月にカンボジアに向け行脚の旅に出発。これはその時の旅の記録です。

CYRきのう・今日

タイ・カオイダン

2月28日
マグチャブといわれる仏教の祝日。3日間も続く盛大な祭りでパレードもくりだした。キャンプの人たちも芝居や踊りを充分楽しんだ。

3月2日
キャンプにあるお寺主催による、ブリムラの歌手グループの夜間コンサートが開かれた。住民たちは一晩中、歌と踊りを楽しんだ。

3月
ＩＲＣ（アメリカの民間団体）がカンボジア本国帰還に備えて、新たに地雷の知識を普及させるプロジェクトを開始。キャンプの地区ごとに地雷の種類、見分け方、対処の仕方等を教える。

4月13～15日
カンボジアのお正月。

4月26日
夜間、キャンプに強盗が入る。金目のものがある家４～５軒が集中的にねらわれ、現金、金、電気製品等が奪われた。内部に手引した者がいると思われる。

5月1日
再び強盗がキャンプに入る。今回は多人数で、タイ兵の宿舎まで襲う。続く事件に、住民は夜になっても家の中ではこわくて眠れず、病棟近くにハンモックを吊って過ごす。

5月2日
レッドバーナ（ノルウェーの団体）とＵＮＨＣＲの協力で、キャンプの住民５人を連れ、10日間カンボジア国内の現状視察に。「懐かしかったが、完全に平和になるまでは戻りたくない」というのが５人の感想とか。

国　内

3月3日
大阪のアジアハウス総会にて「見つめ直そう保育と暮らし」を事務局・峯村が講演。

3月8日
静岡県御殿場市で行なわれた「全国ＮＧＯの集い」の「難民」分科会で、岡山支部の成澤貴子が“地域でできること”を報告。

3月9日
第７回子どもの権利条約学習会。「世界の子どもたちにとっての権利条約の意味」を、日本子どもを守る会の大田堯氏が講演。

3月19日、5月21日
大和定住促進センターと民間団体との懇談会。

3月23日
ＮＧＯ合同バザー「湾岸戦争被災の子どもたちのために」に参加。於：山手ＹＭＣＡ（東京新宿区）

3月30日
第３回カンボジア合同セミナー。山田ボパナさんが「カンボジアの教育と福祉」と題してカンボジアの大家族制度、結婚感、教育、孤児院、障害者の状況等を講演。

4月14日
岡山にて、在タイスタッフ湯山佳代帰国報告会。

4月20日
第８回子どもの権利条約学習会。「武器としての権利条約」を国際教育法研究会の荒牧重人氏が講演。

4月21日
東京・世田谷の瀬田教会バザーに出店、94,800円の収益があがる。

4月27日
第４回カンボジア合同セミナー。「国際政治とカンボジア問題」を朝日新聞論説委員・井川和久氏が講演。

5月11日、7月13日
訪問ボランティア打合せ。活動報告と情報交換。

5月19日
新宿区の戸山公園で行なわれたリサイクルフェアに参加。77,530円の収益金の一部を新宿区に寄付。

5月25日
第５回カンボジア合同セミナー。「救援の目で見たカンボジア」をＪＶＣの熊岡路矢氏が講演。

5月26日
東京・目黒のサレジオ教会バザーに出店。収益金43,700円。

6月2日
東京・目黒の聖アンセルモ教会バザーに出店。収益金20,500円。

6月24日
郵政省の国際ボランティア貯金寄付金の内 894,000円をカンボジアでの幼児と母親の環境向上プロジェクトにいただく。

6月29日
最終回カンボジア合同セミナー。「カンボジアの復興への展望と市民協力」を上智大学の石澤良昭氏、元国連カンボジア人道援助計画の功刀達朗氏と各団体の代表が意見交換。

《編集後記》
国際理解教育は今はまだ試行錯誤の段階のようです。子どもは、感心するほど早く日本語を使いこなすようになり、その分母国の言葉、習慣を失ってしまいます。外国人の親にとって最大のこの悩みに応えられるようになったとき、国際理解教育は本物になるような気がします。　（じゅん）